

『今月の天候と農作業』

通巻第5685号
3月号
令和6年2月29日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

なし

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため平年並か高いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 3月2日(土)～ 3月8日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<2 週目の予報> 3月9日(土)～ 3月15日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 3月16日(土)～ 3月29日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

早期水稲

1 育苗管理

育苗では、温度管理とかん水が重要です。温度管理は、緑化期は日中が25℃、夜間が15℃、硬化期は、日中は20℃、夜間は10℃を目安に管理します。また田植えの7日前頃からは、外気に慣らすようにしましょう。かん水は、午後に行くと床土の温度が下がり多湿となるため、午前中に行いましょう。

2 本田準備

除草剤の効果を安定させるために、代かき作業では、ほ場を均平にすることが重要です。基肥は、施肥時期が早過ぎると成分が流亡するため、代かき頃に施用します。

3 移植作業と除草剤散布

寒波が来る時は移植を延期します。移植後、活着するまでは植傷みを軽減するために深水にします。活着後も、低温や霜の予報が出た際には、深水で管理しましょう。

また、いもち病対策として移植前又は移植時に箱処理剤を施用しましょう。

除草剤は、薬剤の効果を安定させるために、散布後7日間は落水をしないようにします。

麦類

1 排水対策と病害虫防除

雨が多い時期となるため、ほ場の周囲や畦間に排水溝を設けるなど排水対策を行います。

赤かび病の防除は裸麦や小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（葯殻抽出期）に行い、必要に応じて、その7日後頃にも追加防除を行いましょう。

（福川 泰陽）

施設野菜

共通事項

日射量の増加により蒸散量が多くなるため、かん水量を増やす場合には、かん水間隔を短くして回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

きゅうり

日射量が増加すると葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。高温乾燥が原因のため、内ビニールなどを活用し、日射を弱めて湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気をします。

また、収穫位置が上昇しやすいハウスの西側が日中に高温となる時は、サイド面を黒マルチなどで遮光して、生育を調整しましょう。

ピーマン

ハウス内が高温になると授粉がうまく行われず、奇形果や果実の肥大不良による赤果等が発生しやすくなります。換気を十分に行い、ハウス内が高温多湿にならないように管理します。

気温の上昇とともに果実の肥大が早くなるため、最低でも3～4日間隔での収穫を心がけ、草勢維

持に努めます。

トマト類

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が発生しやすくなります。土壌水分の急激な変化が主な原因であるため、少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温乾燥下で尻腐果が発生しやすくなるため、かん水量を増やします。

いちご

施設内温度が上昇すると、ハダニ類の発生が多くなります。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗をこまめに除去し、定期的な薬剤散布を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

さといもやかんしょなどほ場の準備

各種病害の伝染環を絶つために、ほ場や水路近くの残さは除去し、ほ場に残っている残さは可能な限りほ場外に持ち出します。ほ場外に持ち出せない場合はトラクターで複数回耕うんを行い、残さを細かく破碎します。土壌消毒は、春先に地温が15℃以上になり、残さ分解が進んだ後に行います。また、病気の発生拡大を防ぐため、無発病のほ場や種芋採取用のほ場、育苗ハウスに入る時は、長靴や農機具を洗浄しましょう。

さといも

早生種の定植期です。連作障害を防止するため、4年以上作付けをしていないほ場を選び、事前にセンチュウ対策を行います。また、疫病対策では、葉柄にもしっかりと薬剤をかける必要があるため、植付け時には作業管理通路を10m間隔で作ります。

種いもは病害虫の被害や芽つぶれがあるもの、水に浮くものは確実に取り除き、センチュウや疫病防除の消毒を行います。種芋消毒は種芋の表面に薬剤がしっかりと付着するよう、土を洗い落としてから行います。種芋は大きさ順(30～50g程度)に植付けます。

食用かんしょ

トンネル栽培は生育期で、葉焼けが起きないように、換気作業を徹底します。

苗床は温度管理を徹底し、気温の高い日は外気にさらして徒長を防ぎます。

育苗中に葉の萎縮・変色、地際部の茎の枯れや黒変、芋の腐敗が見られた場合は基腐病の恐れがあるため、速やかに除去します。また、採苗は地際から5cm以上離れた所で行い、採苗後に薬剤で消毒します。調整後の薬剤は日光や汚れなどで分解しやすいため、使用期間は一日を目安にします。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用します。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが最も効果的です。時期を逃さないように早めに準備しましょう。

完熟きんかん

収穫が終了したら、剪定の時期です。剪定は樹勢や樹齢を考慮し、間引き剪定を基本にバランス良く枝を配置します。剪定の遅れは新梢の充実を遅らせ、一番花の結果率を低下させるため、3月末までに終わらせます。また、樹勢回復の為に、剪定終了後は土壌改良を行い、細根発生を促しましょう。

日向夏

今月は露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生系から収穫を開始し、在来系は減酸を確認してから収穫します。

袋掛けをしていない果実や、園地の中で特に冷気が溜まりやすい場所の樹冠表面に結果している果実は、寒波によるす上がり果の発生が懸念されます。果実の大きさに対して極端に重さが軽い場合は、中身を確認して収穫するなど、す上がり果の混入がないように注意して選別・出荷しましょう。

マンゴー

3月に入り、夜間の外気温が上がってくると加温機の稼働時間が短くなるため、ハウス内の湿度が高くなります。早期出荷作型ではあざ果の発生、後期出荷作型でこれから開花を迎える園では開花期の病害発生に注意が必要です。早朝換気や送風機能の活用、夜間の十分な加温によって湿度を低く保ちます。

また日射も強くなってくるため、早期出荷作型では日焼け果が発生することがあります。遮光ネット等を利用し、日焼けを防止します。

2 落葉果樹

梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生するため、予防的防除や初期防除を徹底しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

夏秋ギク

6～7月出荷作型の定植時期です。

6月出荷作型の「フローラル優香」は、生育期間を通して低温に遭遇すると貫生花が発生しやすくなるため、電照期間中から温度確保に努めます。

「精の一世」は、親株時の低温遭遇によって幼若性を獲得している場合があるため、定植後から夜温13℃以上で管理を行います。

スイートピー

気温上昇と天候不順による草勢低下を防ぐため、施肥やかん水をこまめに行います。

また、結露による花シミの発生リスクを下げるため、循環扇の活用や、換気、早朝加温などの湿度低減対策を行います。

デルフィニウム

気温の上昇に伴い茎が軟弱になりやすい時期です。ボリュームを維持するため、日中の換気を十分にを行い、必要に応じて葉面散布等による追肥を行います。

ホオズキ

8月出荷作型の定植時期です。萌芽時の生長点の焼けを防ぐために、マルチの穴あけは遅れないようにしましょう。

また、気温の上昇に伴い、ハウス内への害虫の侵入が多くなるため、防虫ネットの設置やほ場周辺の除草を早めに行います。

ラナンキュラス

気温が上昇し、草勢が低下しやすくなるため、かん水や低濃度での追肥をこまめに行います。

また、花シミや灰色かび病の発生防止のために、循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布を継続して行います。

(山塚 裕美)

畜産

家畜防疫対策

令和6年2月15日現在、全国8県において9例の鳥インフルエンザが発生しています。また、県内に飛来する野鳥からもウイルスが確認されており、養鶏場への侵入リスクが高い状況が続いています。農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

家畜

今月は外気温の日較差が大きくなることから、家畜や家禽の免疫力が低下し、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。気温が上がる日中は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回し、換気を十分に行いましょう。また乾燥すると埃や塵が滞留し、呼吸器病の原因となりやすいため、細霧器等を使用して湿度を適度に保つなど、畜舎内の温湿度環境を整えましょう。病気の発生時は早期に対処できるよう、家畜の健康状態の確認を徹底しましょう。

飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの収穫作業や次の作に向けての準備が始まります。作業に向けて機械の点検を行い、飼養管理に影響が出ないように計画的に作業を行いましょう。

(小田 弥生)

特用作物

茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施します。整枝は、葉層を8cm程度確保できるように、昨年最終摘採面から2～3節程度上げた位置で行いましょう。

また、秋整枝を実施した茶園では、越冬芽を切らない高さで丁寧に整枝します。但し、越冬芽の寒害(芽つぶれ)が多発している場合は、1～2節程度刈り落としましょう。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施用します。各地域の施肥基準に準じて、うね間だけでなく雨落ち部まで広範囲に施用します。また、施肥後は、流亡防止と分解促進のためにうね間を軽く攪拌しましょう。

3 防霜対策

防霜対策は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整枝した茶園では春整枝直後から開始し、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とします。

スプリンクラーで防霜する場合の設定温度は2℃とし、日の出後の気温が5℃程度まで上昇し、葉の表面に付着した氷が自然に滑り落ちるまで継続します。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。春整枝と裾刈り後は、速やかに地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布します。

5 苗の定植

露地で育苗した苗は、2月下旬～3月中旬が定植期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）が定植期です。

（竹田 博文）

しいたけ

1 採取

発生したシイタケは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になるため、なるべく晴天を選んで採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、エビラなどに広げて品質の低下を防ぐため、速やかに乾燥します。特に雨子は素早く処理します。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。

（堀川 和也）

たばこ

今月は、本畑への移植となります。品質・収量の確保に向けて適期・適切に健苗の移植に努めましょう。

1 移植方法と注意点

移植は、葉数が9～10枚（米粒大の心葉まで含めた枚数）で、白い根が肥土全体を覆っている根張りの良い苗を選んで行ないましょう。

葉数が少ない小苗を移植すると本畑での活着と生長が遅くなり、また大苗では、本畑初期の低温に

よる不時発蕾（葉数減少）を生じやすくなります。

植穴は、直径10～13cm、深さ13～15cm程度に揃えましょう。

極端な深植え、浅植えは、初期生育が遅れ、不揃いの要因となります。

また、移植の際は、抱土が露出しないよう注意しましょう。抱土が露出していると乾燥し、根の伸張が悪く、活着が遅れ、不揃いの要因となります。

移植後は、移植した苗の確認手直しを行ない、活着促進に努めましょう。

2 移植後のほ地管理

排水溝の完備を徹底し、生育不良、病害発生防止に努めましょう。

マルチ片の回収袋を設置し、植付穴のちぎれそうなマルチ、ほ地内に飛散しているマルチ片を回収しましょう。

ドリフト（農薬飛散）対策として、他作物が隣接する場合は、周辺農家との話し合いを行い、障壁物の設置やのぼり旗の設置等を行いましょ。

アブラムシの飛来に備え、防虫ネットの設置や共同防除に向けた話し合いを行い、黄斑えそ病やキュウリモザイク病の発生防止に努めましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

農作業安全

3月から春の「農作業安全確認運動月間」です。トラクターで作業する際には、ヘルメットやシートベルトを着用するなど農作業安全に努めましょう。

内容の詳細について

2月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病		育苗時の発生の有無にかかわらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ		越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕うんして殺貝します。この場合、土壌は硬く、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。貝の生息量が多い場合には、防除薬剤の本田施用を実施します。
施設野菜類	病害全般		天候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底するとともに早期防除に努めます。 また、夜温が高めの加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意が必要です。
冬春きゅうり	うどんこ病 べと病 灰色かび病 褐斑病	並 やや多 並 並	発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除します。多発したほ場では、7日間隔で複数回の連続防除を実施します。また、薬剤の感受性低下を防ぐため、異なる系統の薬剤を用い、ローテーション散布を行います。
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	やや少 やや少	黄化えそ病の感染株を確認した場合は、速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理します。 また、黄化えそ病を媒介するミナミキイロアザミウマは、発生初期に防除するとともに、卵とさなぎには薬剤が付着しにくいので、最少でも7日間隔で3回の連続した防除を行います。
	病害虫全般(改植時の留意点)	-	ウイルス媒介虫でもあるアザミウマ類、コナジラミ類などに対して、抜根する前の防除を徹底し、抜根後は20日間程度蒸し込みます。次作の定植時に薬剤を施用し、防除を徹底します。
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病 黒枯病	並 並 並	うどんこ病は乾燥、斑点病・黒枯病は多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の適正な温湿度管理、排水対策等を徹底します。また、発病葉は伝染源になるため、適宜除去し園外に持ち出します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ 外コナジラミ	並 やや多 やや多	いずれの害虫とも、今後、暖かくなるにつれて増殖速度が速くなります。特にアザミウマ類の発生が多いハウスでは、最少でも7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 すすかび病 灰色かび病 うどんこ病 外コナジラミ	並 並 並 やや多 やや多	葉かび病、すすかび病、灰色かび病は多湿条件で発生しやすいので、施設内が過湿にならないよう換気に努めます。うどんこ病の発生が多くなっています。多発すると防除が難しくなるので、発生が少ないうちに防除を徹底します。 タバココナジラミは、今後、気温の上昇とともに活動が活発になるため、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽(たんそ)病 ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並 やや少 並 並	いずれの病害も多発してからでは根絶は困難なので、低密度のうちに定期的な防除を行います。 ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるので、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあるので、低密度時に防除を徹底します。
かんきつ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 ミカンハダニ	並 並 やや多	いずれの病害も越冬病斑は伝染源になるので、発見したら直ちにせん除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいので、発芽初期の防除は必ず行います。 ミカンハダニの生息密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(~3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、 http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki です。			